

集 文 詩

年 二 二 九 一 が 我

著 夫 春 藤 佐



版 出 社 潮 新



詩文集  
我が一九二二年

佐藤春夫著



詩文集  
我が一九二二年  
佐藤春夫著

詩文集  
我が一九二二年

佐藤春夫著

新潮社出版

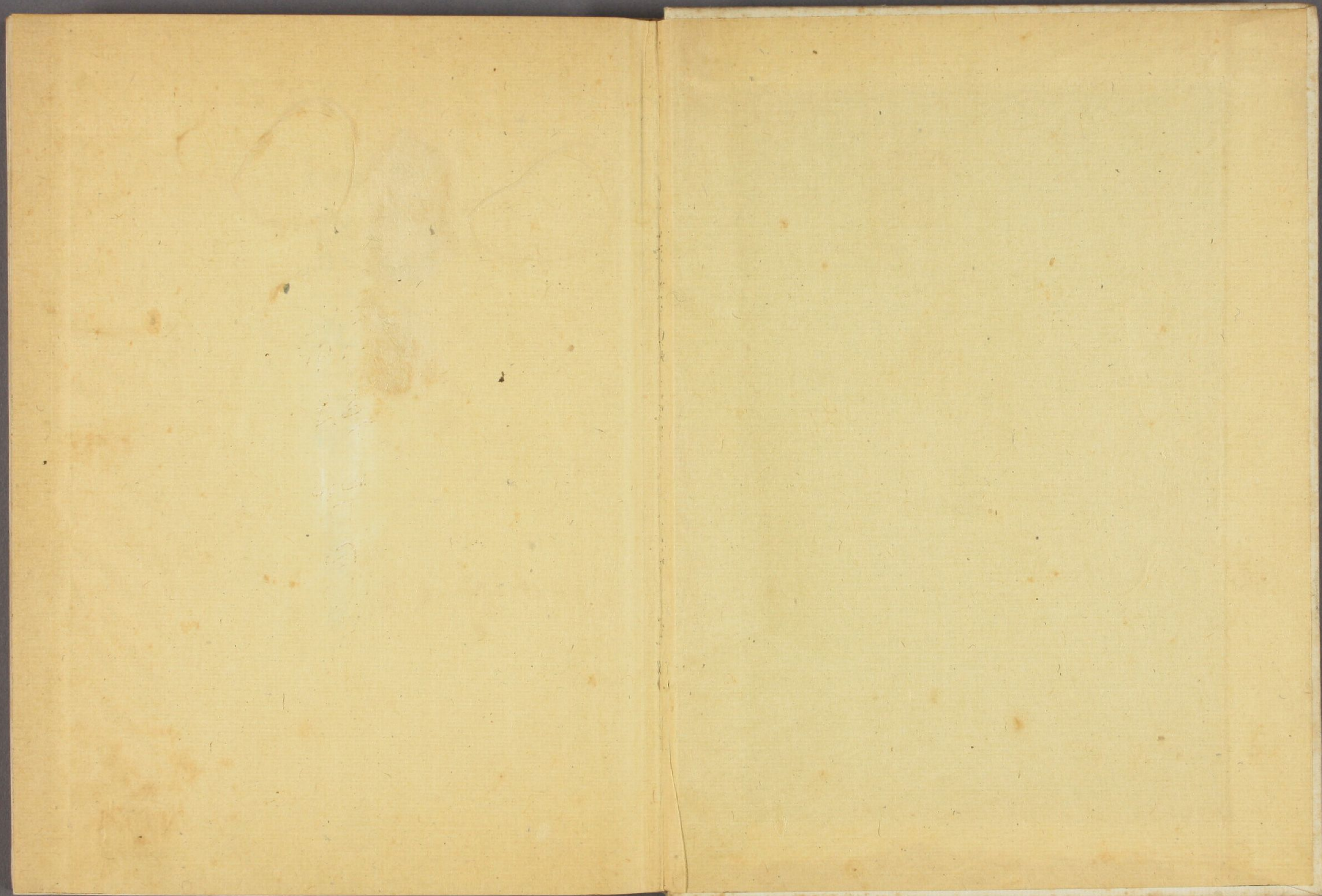




我が一九三二年

佐藤春夫著







詩文集

我が一九二二年

佐藤春夫著

一九二三年 新潮社出版

## 序

私達の友人は既に、彼の本性にかなはない總ての物を脱ぎ棄て、すべての物を斥けた。そして彼自らの手で紡ぎ、織り、裁ち、縫ひ上げたところの、彼の肉體以上にさへ彼らしい輕羅をのみ纏ふて今、彼一人の爽かな徑を行つてゐる。

他の何人に對してよりも、自分自身に對して最善の批評家であるところ

の彼は、つねにただ、彼の子供として恥しくない子供だけを生み、より恥しくない子供だけを育て上げてゐる。彼のと異つた藝術を要求することは固より許されよう。彼のにまさつて完全なる（或は完全に近い）藝術といふものは、たやすく現代の世界に見出されないであらう。

彼の藝術は、詩に於て最も彼らしきところを、最も完全なるところを示してゐる。

今の詩壇に對する彼の詩は、餘りにも渾然たるが故に古典的時代錯誤であり、餘りにも潑瀾たるが故に未來派的時代錯誤であることを免れない。

嗚呼、この心憎き、羨望すべき時代錯誤よ。時代錯誤の麟鳳よ。永久に

詩人的なるものよ。

『永久に詩人的なるもの』私達の友人よ、ねがはくは彼によりて、彼を取りまける總ての者が、詩の天上にまで引きあげられて行くことを。

一九二三年一月十四日

生 田 長 江

我が一九二二年 目次

序文・(生田長江) . . . . . i

秋刀魚の歌 . . . . . 4

秋衣の歌 . . . . . 10

憂たてさ . . . . . 20

浴泉消息 . . . . . 23

或る人に . . . . . 29

冬の日の幻想 . . . . . 31

同心草拾遺 . . . . . 33

つみ草(三三)

別離(三四)

龍膽花(三六)

蕙雨山房の記 . . . . . 39

あぢさゐ . . . . . 53

杏の實をくれる娘 . . . . . 61

高橋新吉のこと . . . . . 81

我が一九二二年

裝幀 岸田劉生

詩稿

月をわび身を侘びつたなきをわびてわぶとこたへん  
とすれど問ふ人もなし。

芭蕉翁尺牘より

秋刀魚の歌

四

あはれ

秋風よ

情あらば傳へてよ

—— 男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食<sup>くら</sup>ひて  
思ひにふける と。

さんま、さんま、

そが上に青き蜜柑の酸<sup>す</sup>をしたたらせて

さんまを食ふはその男がふる里のならひなり。

そのならひをあやしみなつかしみて女は

いくたびか青き蜜柑をもぎて夕餉にむかひけむ。

五

あはれ、人に捨てられんとする人妻と  
 妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、  
 愛うすき父を持ちし女の兒は  
 小さき箸をあやつりなやみつつ  
 父ならぬ男にさんまの腸はらをくれむと言ふにあらずや。

あはれ

秋風よ

汝なれこそは見つらめ

世のつねならぬかの團まどか欒らんを。

いかに

秋風よ

いとせめて

證あかしせよ かの一どきの團まどか欒らんゆめに非ずと。

あはれ



秋風よ

情あらば傳へてよ、

夫を失はざりし妻と

父を失はざりし幼兒とに傳へてよ

——男ありて

今日の夕餉に ひとり

さんまを食ひて

涙をながす と。

さんま、さんま、

さんま苦いか鹽つばいか。

そが上に熱き涙をしたたらせて

さんまを食ふはいづこの里のならひぞや。

あはれ

げにそは問はまほしくをかし。

(大正十年十月)

# 秋衣の歌

その一

去年立秋ののち旬餘の或る日、机に凭りて「情史」を繙き偶々卷二十四を開きしになかに洞庭劉氏といふ一項あり、

「洞庭劉氏 其夫葉正甫 久客都門 因寄衣而侑以詩曰、情同牛女隔天河  
又喜秋來得一過 歲歲寄郎身上服 絲絲是妾手中梭 剪聲自覺如腸斷  
線脚那能抵淚多 長短只依先去樣 不知肥瘦近如何。」

これに比ぶれば謝惠連が擣衣の篇のごとき徒らに美辭を弄ぶものといふべし。われは三誦して秋夜の寡居に感はことのほか深かり。

織姫おひめと身をなして

おもふ人いと遠し、

歎きつつ織るものは

なつかしき人に着られよ。

幾とせぞ 天の川

逢ふことぞ待たるよ、  
秋ごとに君に行き  
君にそふ衣ころもねたまし。

絹裂けば音にぞ聞く  
わが胸の千々の切なさ、  
縫ひゆけばなみだ落ち  
縫ひさしむ針ぞ憂うれたてき。

桁ゆき丈は昨まのままども  
わが心昨まのままども、  
憂うれれたくも瘦せ給へりや  
憂うれれたくも肥え給へりや。

もとより即興の戯れにして原詩の哀切に對して恥づ。

その二

洞庭劉氏の詩を三誦してよりのちまた月餘、或るゆふべ身に秋冷をおぼえ  
て自ら秋衣をさぐるに事によりてわが思ひ凄然たるものあり。その夜筆を

とりて「秋衣の歌」をつづれども意はありて詩は遂に成らず。これを篋底に投じ去りぬ。今年また秋衣の候となる。われは假そめながら病に伏して他家に身を寄せたり。秋宵只一人の爲めに長く孤愁は時に甚だ堪ふべからず。つれづれのあまり舊稿を思ひ出でて再び見んことを願へども協はず。蓋し轉々たるわが流寓のうちに失はれたるなり。乃ちこゝろにこれをたづねつ漫吟し得て些か意を遣りぬ。詞の稚拙は既に恥ぢざるなり。

灯かけとどかぬ小暗さに

さすらひ人の行李より

ひとり索ればわびしさよ  
秋風に著る秋ごろも、

劉氏を妻に持たぬ身の  
わがとり出づる古ごろも  
ころもとればそぞろにも  
おもかけぞ立つ 憂き人は。

わりなきことを言ひいでて

恨むよしなき佳き人よ

汝がいとし子の秋ごろも

裁つ手をしばしやめよかし、

絹を二つに裂かんとし

こほろぎの音をしばし聴け

そのかそけさを胸に知れ

つれなき人とならじかし。

人目を怖ぢて 汝はそも

あわただしくも運ぶ手に

そのほころびをつくろひし

ころもは曾て無かりしか、

今日をかぎりの別れの日

吐息とともに汝が置きて

くつがへりたる味噌汁に

しとどなる膝なかりしか。

劉氏は人の妻なれば

ひとりとり出しわがころも

濯ぐべき人もとめねば

糸目もふるし古ごろも、

秋の灯かけにすわるとき

新らしく着る古ごろも

膝なる汚點はわりなくも

いみじき汝を怨めとぞ。

(大正十一年九月)

## 憂たてさ

(アアネスト ダウスン)

我は悲しめりとは非ず、我は泣くこと協はず  
わが思ひ出のすべては、はた、眠につきつつ。

見守りつつ、ゆく水の白く異しくなりまさりゆくさま、  
日ねもす夕暮まで我は見守りつつ、川面の變りゆくさま。

日ねもす夕ぐれまで我は見守りつつ、雨の  
窓がらすのうへ打ちたたくそのうれたさ。

我は悲しめりとはあらず、ただ我は  
かつてわが願ひなりしもの皆に倦んじ果てぬ。

かのひとの唇や、かのひとの眼や、ひねもす  
わが身には影の影なるものとはなりつつ。

君がところに焦がるるわが渴きは、ひねもす  
忘れられしものとはなりつ、夕ゆふべの來るまでは。

かくて我は悲かなしみのさなかに遺のこされつ、泣かんとす  
夕ゆふべは目覺めそむるわが思ひ出はかずかず。

### 浴泉消息

一 大ぶん熱が出ました

隣室の客は男ふたりだ。

酒をのんで、いつまでも

何だかくだらな議論をしやがつた。

やつと寝たと思つたら

ひとりは直ぐと怖ろしいびきだ



ひとりは又すばらしい齒ぎしりだ  
これではまるでさつきの議論のつづきぢやないか。  
そのいびきをかうして聞いてゐると  
自然、豚のことが思ひ出されるし  
齒ぎしりの方はまるで柱時計のぜんまいを巻いてゐ  
るやうだ。

おれは豚小屋の番人になつて

番小屋の柱時計に油の足りないねぢを掛けてゐるの  
か知ら………

ゆうべの寝汗のしみ込んだこの掛ぶとん  
何だかほし草のにほひがして來た……

2 だんだんよくなつて來るのです

浴泉は毎日、私のおてきの  
岩苔のやうにこびりついた奴を洗ひ落すが、  
谷川の水は毎晩、私の心に流れこんで  
それが心の古疵ふるきずに何としみるかよ。

ひとりぼつちの部屋へ月がさすから  
電燈を消したら  
おれの目から温泉が出たつけ。

3

よほど快方に向ひました

秋になつたら  
小さな家を持たう、  
小榻一椽書百卷

さうして  
煙草とお茶とのいいのが飲みたい、  
そこには花畑がいる、  
妻はもういらぬ  
童子を置いて住まう、  
童女でも悪くはない、  
さうだ、それよりさきに  
一度、上海へ行つて  
支那の童女を買つて來よう、

十四ぐらゐのがいい、

木芙蓉の蒼のやうな奴はいくらぐらゐするだらう？

(大正十一年八月)

### 或る人に

あなたの夢は昨夜で二度しか見ないのに

あなたの亭主の夢はもう六ぺんも見た

あなたとは夢でもゆつくり話が出来ないのに

あの男とは夢で散歩して冗談口を利き合ふ

夢の世界までも私には意地が悪い だから

私には來世も疑はれてならないのだ

あなたの夢はひと目で直ぐさめて  
二度とも私はながいこと眠れなかつた  
あなたの亭主の夢はながく見つづけて  
その次の日には頭痛がする ……  
白状するが私は 一度あなたの亭主を  
殺してしまつたあとの夢を見たいものだ  
私がどれだけ後悔してゐるだらうかどうかを

(大正十一年十二月)

## 冬の日の幻想

霜ぐもる十二月の空は  
干<sup>ひ</sup>ものやくにほひにむせび  
豆腐やのちやるめら 聞けば  
火を吹いておこすこの男の目に ふと  
どこかの 見たこともない田舎町の場末の  
古道具屋の四十女房がその孕みすがたで

釣ランプをとすのだ  
かかるゆふべの積み累ねに  
聖ひじりならぬわが厭離のころはきざした。

(大正十一年十二月)

### 同心草拾遺

#### つみ草

風花日將老  
佳期猶渺渺  
不結同心人  
空結同心草

しづこころなく散る花に

長息<sup>ながいき</sup>ぞながきわがたもと  
なさけをつくす君をなみ  
摘むやうれひのつくづくし。

別離

人と別るる一瞬の  
思ひつめたる風景は

松の梢のてつぺんに  
海一寸に青みたり。

消なば消ぬべき一抹の  
海の雲より洩るやらむ、  
焦點とほきわが耳は  
人の嗚咽を空に聞く。

龍膽花

山路きて 君が指すままに  
わが摘みしむらさきの花、  
君が問ふままに その名を  
わがをしへたるりんだうの花、  
そのかの秋山のよき花を 今は  
ただしばしば思ひ出でよとぞ  
わが頼むことは わりなき。

散文

先生、どうもこのセンチメンタリズムといふ奴をど  
うにか片づけなげや駄目ですれ。死んだ小鳥のやう  
なものだから。——左様さ。その小鳥の死骸をつま  
み出して鋪石へたたきつけて、その代りに一つ猛獸  
を飼ふんだ。一九二三年には。——ふふん。その鳥  
籠へれ。  
(メラ刷を見ながら餘白に、 著者)

## 蕙雨山房の記

蕙雨山房はわが父の山房なり。この一文はわが歸省  
中の手記を抄出して綴り合せたるもののみ。悉く一  
家の私事に關す。看る人幸にこれを容されよ。

鴛鴦の兩翼のうち各一枚、三角形をなせる特別の羽根あり。これを思ひ  
羽と呼ぶとぞ。或る時、人の自ら打ちとめたりとて哀れはあかぬまの木の



間のうれにいづれ一羽はひとり寝をやすらむ鴛鴦をわが家の厨房に興へたる夜、父はおもひ羽といふ名をわれに教へたまひつつ捲り去られたるおもひ羽をしばし弄びわたまひけるが、筆とり上げて古新聞の上に書き捨てたまふを見れば、

むつまじく並んで何をおもひ羽ぞ

もとより家大人梟叟が即吟なるべし。家大人の作を改むるがごときことあらば慎みなきの甚しきものなるを、われはその句をながめつつふと私ひそかにこころなくも改むるともなく一字を改め去りぬ。

むつまじく並んで何のおもひ羽ぞ

ただ一字を更へたるのみ。さるにても句はおのづから全然別義を生じたるに似たらずや。家大人の作は脈々たる餘情の故に大雅にして温藉。省みてわがふと讀み改めたるものに到りては、わが心ゆゑにあまりに悲し。その露はなる主觀は孤愁を訴へて哀しみて傷やぶりぬ。

又。

家大人偶々「暮の秋」の題にてわれにも一句ものせよと筆を興へたまふ。即ち記す。

石ならば雲を夢見む暮の秋

家大人はわが意の幼きを敢て咎めたまはず、ただ一語、「よし、南畫趣」  
とのみ。

その夜ひとり床中に臥して、その同じ句のこころを歌はばやとて「悲秋」

いづれさびしき秋の夜の

ねざめがちなる石の夢

いつの日か見し夏雲の

おのがすがたと見るばかり

切なきものを夢むとぞ

おのがすがたにまがふとも

消えてあとなき雲なれば

ただ東の間のものなるを

いつまた見むとちかひけむ

苦しきものをしたふかな

理に落ちて冗長。體をなさず。眠もまた成りがたし。枕頭なる模刻本飛

鴻堂印譜を繰りて時をうつす。一顆あり、文曰

落寞雲深詩夢淺

こは今までにても幾たびか眠成り難き夜な夜なのつれづれにこの印譜を  
繰り開くごとに、その文に困りてわが心に映じたるもの。わけても今夜こ  
れを見れば、昔時既にわがために碑銘を選びし人ありし心地さへぞする。

行く春の蝶のうつつぞ哀れなる

かかる句なり。いづこにておぼえけむ、うろおぼえに芭蕉翁が句とのみ  
思ひしに、父上、翁にはかかる句はなきにあらずや。また夜半翁がものと  
も覺えず。いかがにや。さらば何人の句ならむ。父上はいかに見給ふやは

知らず。兒はただいつのころよりか屢々口ずさみ慣れて、そのあはれを忘  
じがたなきがままに、もし古人にかかる句なしとならば、わがものにせば  
やとさへも思ふなり。いかに父上。

かかることも語りつつ、しばし世情の憂さを忘るる折々に、蕙雨山房  
の幾夜かは更けぬ。

時には清人の畫冊をとり出でて掌中に品し、また幾度か鏡村遺稿を机邊  
に繙きぬ。

鏡村は父の父なり。わが身には祖父なり。夭折してしかもその歿したるはわが父の生るるに先立つこと數旬。わが父はつひに終生一たびも己が父を見ざる人なり。かくばかり幸うすかりしわが父は、その祖父すなはちわが曾祖父の手に人となりたまひけるが、或る時曾祖父の、父にむかひてのたまひけるは「あな、いみじくも生ひ育つものかな。汝、汝が父を見むとならばただ鏡中の己が影を見よ。げに生きうつしなる生きがたみよ」と。その言葉のあまりに悲しくて父はひそかに鏡とり出でて鏡中の影に見入りつつ泣ける昔ありしが、六十路にしてただ夢にのみ見るその父はいつも二十年<sup>たとせ</sup>あまり五つ六つなる過ぎし日の己が面影なるもをかしからずや、とか

つて父のわれらに語りたまひたるも切なし。常に父の机上を去らざる鏡村遺稿は、父の編みたるものにして父の手澤によつて黒し。遺稿はおほむね二十歳前後のものなりといふ。

滿城名月滿城秋

一半幽情一半愁

南望郷天千里遠

賞心今夜何登樓

蓋し、その京師遊學中の作たるや明かなり。

秋は滿ち滿つ月こよひ

愁ぞゆかしわがこころ

ふるさと遠きわがどちよ

いざ登り見む 高殿たかどのに

わが祖父もまた少年にして眉を伏せて郷愁の歌をやうたひけむ。

緘口勿言天下事 放懷且讀古人書

蓋しその座右銘なり。文久元年、學成りて郷に歸り未だ年久しからざる或る日、程近き津に米利堅の黒船來ると聞きてこれを見ての歸るさ熱病を得て遂に起たず。享年僅に二十又六。青雲一抹の煙、壯心一椀の土のみ。

曾祖父椿山先生は寧ろ多幸の人なりしが如し。壽は古稀に足る長者として懸泉堂の大人うしは永く郷黨の仰ぐところとなりぬ。丹鶴城主水野土佐守忠央その典醫として召しける時、野人禮に爛ろうへいはず且つ老病役に堪へずと辭して仕へざりし由は當時の文書によりて知らる。

遺したまひしそこばくの歌草を拜するに、おのづからなる心のゆとり偲ばるるも床しと、わが身には慕るるなり。

しづが家もみ山のま柴樵り積みて

かまど賑ふ年の暮かな

また、身まかりたまふ二年ととばかり前の病中の咏草といふは

寝ねば寝ね起くれば起くる吾妹子

に撫でさすられて夜をば明しつ

枯れてゆくこの身をまめに守る妹

がこころと匂ふ窓の梅が香

この連作は、その妻なる人、すなはちわが曾祖母の

寝ねば寝ね起くれば起くる友白髪

なほ末ながくつかへまつらん

とありけるに和したるものよしその前書に見えたり。あはれ年久しく

人生の憂苦を相わかち折にふれてはかたみに吟詠をもて相慰めけむ翁と媪  
 とのおもかけ思ひ見るだに胸晴るる心持せらる。世に孤鸞の歎きありとは  
 かかる人々ゆめ知らざらん。さるを人生何ぞ多恨事の盡きざるや、この團  
 欒の家はただひとりの男子、年將に壯なる者を失ひて稚けなき孫を得たり。  
 埋火に泪の煮にえる夜ごろも思ひやらるるなり。

親をおもひおほ親をおもひ遠とほつ親をはるかに偲べわが詩魂と愁思との  
 負ふところを知らるるも嬉し、悲し。努めざらめや。さるをわれは癡愚に

して放縦度なく幾たびか人を戀ひて心はやぶれ三十にして未だ家を成し得ず、妻なし、子なし。わくら葉のおち葉なす身の、さ迷ひさ迷ひてただふる里にかへり來ればこの母あり、この父あり。晩秋の燈下に父子相對ひて藝文を語れば、わが生も亦、縷々として人生の幽情に觸れ得てわが心といへども慰み<sup>な</sup>和みぬ。しかも、身に殘るこの幸福を知るとともにこの時、生涯その父を見る術<sup>すべ</sup>なきわが父の心事を纒にし<sup>す</sup>のび得て今更に父を仰げば、悲し、童子めくおん顔ばせながらおん髪はいつしか白くして。

(一九二二年十二月)

### あぢさゝる

——あの人があんなふうにして不意に死んだのでなかつたら、假にまあ長い患のあとでもなくなつたのであつたら、きつと、あなたと私とのことを、たとへばいゝとか決していけないとか、何かしらともかくもはつきりと言ひ置いたらう……わたしはどうもそんな氣がするのです。でも、あなたがあれば七年も経つのにどうして今日までひとりであらつしやるか、またわたしがどうして時々お説教を聴きに出かけたりするやうな氣持

になつたか、そのわけをあの人、口に出しては言はなかつたけれどちやんと知つてはゐたのですものね。それならばこそ、私を一そうやさしくもしたのでせう。そのことを思ふとわたしは、それだけにまたどうしていか心が迷ふの。さうしてわたしとあなたとがこんな話をしてゐることも、またこんなことを思つて見ることも氣が引けてならないのですわ……

さう、今のさつき目に涙を溜めながら女の言つた言葉を、男は、自分の心のなかで繰返して見た。さうして、女がどういふわけでそんなことを言ふかといふ心持が男にもわかるやうに思へた。それにつけてもあの時から言はうか言ふまいかと思ひまどうてゐる事を、今も、女に打開けようかど

うかと考へたりする。それは、——全く、私はあののち幾度あの男が死んでさへくれたら。……と思つた事があるか知れないのです。あなたの夫があんなふうにして溺れ死んだその瞬間にも、私はもしかすると遠くて何も知らずにはあつたが、それを思ひつめてゐなかつたとは言へないのです。實際、それほど度々私はそのことを思つたのだから。男が言はうか言ふまいかとしてゐる言葉といふのはそれだけのことである。

六疊の佛壇の間に、蒼白くやつれた病兒——六つになる女の子の枕元から少し離れたところに女は坐つてゐる。さつきから極く低い音で三味線を弄びながら、目を疊の上に見据ゑてゐる。その同じあたりの疊の上を見入



つて男も、今言つたやうなことを考へつゞけてゐたが、そんな神経質な考へ方を突放さうとして、目を上げて女の横顔を凝と見た。肘枕をしてゐる男の目には女の顔が少し紅を帯びて來たやうに思へた。

その時、部屋のなかが少し明るなつたと思ふと、障子の腰にうすれ日が射した。

「あら、日が當つて來たわ。」

ひとり言のやうに女は言つて、身を浮かせながら障子を引いた。雪に斷え間があつてさみだれの晴れ間である。女は空を見上げてから、意味もなく男の方を見返つた。少し不自然に歪んでゐる笑ひ顔であつた。まだ乾き

きらない今のさつきの涙と笑とで女の眼はかがやかであつた。今まで女の横顔を偷み見てゐた男の目は、女のそのまなざしをまぶしがるやうに避けて、視線は庭の方へ向けられた。軒から雨だれが光つてしづくしてゐる。

「紫陽花があつてもいい庭ですがね。」

男はつかぬことを言つた。

女は答へる――

「いやですよ、紫陽花などは。あれは病人の絶えない花だといふぢやありませんか。」

「さう。そんなことも言ひますね……」

女は再び三味線をとり上げた。

男は急に肘枕から起きて坐り直した——彼は、まはり縁に人が來ると思つたからであつた。

「ばあやがもう歸つたのかしら」

女もさう言つた。

眠つてゐた子供が、突然、その時、けたたましく泣き立てた。母親は今とり上げたばかりの三味線をそこに置くと、子供の枕元へにじり寄つた。

「お父さん！ お父さん！ お父さん！……」

子供は母の顔を見ようともせずになさう叫びつづけた。

「どうしたの。どうしたの。——夢を見たのね……」女は憫みを乞ふやう

に男の方を見やりながら、初めは子供にさうしてだんだんと男に言つた。

「……本當にへんな子ですよ。今になつてお父さんばかり戀しがるのよ。

それにこゝてなけや 佛壇の間でなけや寢ようとしないの。」

男はそれには答ようともしなかつた。心臓が不思議に早く打つて、耳鳴がするのにながついた……

女はふと自分の背後をふりかへつて見なければならなかつた。そこにはしかし、もとより何もなかつた。たゞ病み疲れた子供は、瘦せおとろへて一そう大きく一そう透明になつた黒い瞳をぱつちりと見張つて、母の肩ご

しに、空間を、部屋の一角をいつまでも凝視した――。

### 杏の實をくれる娘

今ごろの季節になると、

――と、或る人が話した――

私はきつと或る娘のことをいつもよりも意識的に思ひ出すのだ。

それは私が十ぐらゐの時のことだから、二十年も昔になる。

その記憶は、たとへば昨夜見た夢のやうに、或る部分ごくはつきりして  
ゐる代りには忘れてしまつてゐる部分はどうつなぎ合せていいかわからな

い。娘は何といふ名だか知らない。人にたづねても　その娘をたしかに知つてゐなければならぬ筈の私の母なども、その娘の名を、それどころではないその娘そのものさへ知らないやうなことを言ふ。ただ、

「さあ、誰のことを言つてゐるのだらうねえ」

といふやうなことを答へるきりである。

私はその娘を、それ故、「杏の實をくれる娘」といふ風に思ひ出す。もどかしい氣がするけれどもそれより外に仕方がない。

その娘が、自分のうちの庭にでもその木があつて私にそれを、私にそんな印象を刻むほど度々それをくれたのかといふと、どうもさうではないや

うである。その娘が私のうちへそんなに度々出入してゐたといふ記憶は私にはない。それとも私はそれを忘れてゐるのかも知れない。何にしても杏の實は、多分たつた一ぺんだけくれたのではないかと思ふ。さうして私はこの娘から貰ふまで杏といふ名もその果物をも知らなかつたやうに思ふ。それらのことはしかし皆ぼんやりしてゐるが、杏の實を一度もらつた時の印象は私にとつて今でも實にあざやかである。三色版のやうにはつきりと思ひ出せる。

かの女は私の子供ごころにはもう一人前の大人に見えたが、本當はその時十七ぐらゐより大きな娘ではなかつたらうと思ふ。大した理由なしに、

私はその娘を度々思ひ出してゐるうちにいつのころからか、さう思ひ込んでゐる。

柄の大きな色の白い娘であつた。

私は家のなかから駈け出して曲つたはずみに危く人に突き當りさうになつた。踏みとどまつて見上げると、私の前に立てゐるのがその娘であつた。娘は私を見て白い齒を少し見せて笑つた。それから、初めから手にもつてゐたのだかそれともその時袂から出したのだか、ともかくも私に私が今までに見たことのなかつたやうな果物を一つくれた。それからもう片一方の

手にもう一つくれた。それから無論何か言つただけけれども私は覺えてゐない。きつとその時にもよく聞いてはゐなかつたらうと思ふ。子供のころの自分のことを思ひ合すと私はその時、きつと、ひどくはにかんでどぎまぎしてゐたに違ひないと思ふから。娘は直ぐに、私の今出て來た門をくぐつて私の家へ這入つて行つたが、私はひとりになると、もう一度自分も門をくぐつて庭の木立のなかでその果物を二つながらたべてしまつた。本當なら、さういふことに就てはしつけのやかましい私の母であつたから、私は人から貰つたそんなものを黙つてたべてしまつてはいけなかつただけれども、さうして今までにはまだ一度もそんなことはなかつただけれど

も、私はその時に限つて黙つてこつそりと食べたのをおぼえてゐる。私はその果物をたべながら、見たところは美しいがあまり甘くないと感じながら、その味のことよりは今のさつきのそれをくれた娘のことばかり思つて見た。それからこの果物は太へんにほひがすると思つたら、その瞬間にどうしてだかその娘のさつきの顔がぼんやりと目にうかんで來た。うしろから明るい太陽をうけて立つてゐたからであらう、娘の頬のうぶ毛が私の目にのこつてゐた。私は二番目の果物を見ながら、その果物にもうぶ毛のやうなものがあるのを見つめながら、それに齒をあてる時に、この果物は一たいに色でもつやでもあのひとの頬つぺたに似てゐると思つた。

その見なれない果物が何といふものであるか私はそれを、その後もしばらく知らなかつた。時々その果物を店さきなどで見出すことがあつて、その名を聞かうと思つてもどうもそれを言ひ出せない氣がした。その次の夏あたりになつて私は、その名を一緒に町を歩いてゐた女中から教へてもらつた。

また或る時、私が何といふこともなく、私の家から十町ほどの遠さのところにある小路の通抜けを物好きに歩いて見てゐると、私はひよつくりそ

の杏の實をくれた娘に出くわした。

「おや、あのひともこんなところを歩いてゐる！」

私はさう思つて何故かひどくうれしいやうな驚いたやうな氣がした。さうして直ぐに、

「このひとのうちはこの近所なのか知ら？」と考へた。

杏の實をくれる娘は、勿論直ぐに私を見つけた。といふのは、そこは人どほりも少いし道も狭かつたのだから。この時のこの娘の様子を、しかし、私はどうしてだかどうもはつきりとは覺えない。多分私はうつむいてしまつてよく見られなかつたのではないだらうか。その代り、その時その娘の

言つたことははつきりと私の耳に残つてゐる——

「坊ちゃん。こんなところへ遊びに來たの。こんな遠い狭いところなどを通らない方がいいわ。」

先づそんな意味のことであつた。さうしてその言葉を私ももつともだと思つた——用もないのにこんなところを通つて見てゐた風變りな自分は叱られても仕方がないと思つた。何かしら、そんな氣のする道であつたから。

これだけの事だつたら、私はいつかもうこの娘の事は忘れてゐるかも知れない。ところが、杏の實をくれる娘はその後に間もなく私の心持にもつ

と深い印象——と言はうか感銘といはうか、ともかくも或る深い何ごとかを與へた。今まで言つた記憶は、寧ろ、私がこれから言はうと思ふ事實があつてから後に、その時の子供の私がこの娘のことをいろいろ思つてゐるうちに、思ひ出しておぼえ込んで置いた事であるらしい。それほど子供の私にかの女を忘れがたくさせた事といふのは、杏のことや路次のことなどと言ふへだたつた時のことではなくて、その同じ年の冬か、でなければその次の年の冬であつたか、何にしても冬であつた。さうして私はやはり十か十一ぐらゐであつた。

その或る正月前後の冬の日の夕方に、私のうちの座敷へどこからか一人の病人が寝たままでつれられて來た。私はその奇妙な病人のお客を見もしなかつたし、また誰もその人のことを私に話しもしなかつた。私が聞かうにも家のなかにはひどく混雜をしてゐて女中でも下男でも私の相手になつてくれる人はゐなかつた。私たち兄弟と遊んでくれたのはまだ十五ぐらゐの書生であつたが、私たちを母家おもやから遠くにある離れの方へつれて行つて、そこで歌がるたやら雙六などをしてくれたが、彼は座敷の方のことは何も知らなかつたと見えて言はなかつた。

混雜は夜になつてもやまないらしかつた。さうして私たち 多分その時八つと六つとであつたらう弟と私との三人は、十時ごろになつてやつと



その離れへ寢床を用意された。そんな取込みのうちであつたし、それでも事が足りるのだから私たち三人の子供は、大きな一つの寢床のなかへ眠ることになつた。私たちは寢床が出来るまでにもう眠入つたり居睡をしたりしてゐたが、その寢床の用意をしに来てくれたのは女中とそれからあの杏の實をくれる娘であつた。さうして寢床が出来ると書生は行つてしまつて、そこへ代りに残つたのは杏の實をくれる娘であつた。私は次の弟と枕を並べて寢た。一番末の弟がその娘と並んで私たちの足の方へ頭をやつてその同じふとんのなかへ組みちがつて眠つた。私はもう大へん眠かつたし、その娘もものを言ひかけなかつたし、私は直ぐ深く寢入つてしまつた。

夜中に、私は寢苦しいやうに思つて目がさめた。すつかり目が覺めさらないうちに、私は自分の小さなからだがつかりと抱きすくめられてゐるのを感じた。さうして私は私を抱きすくめてゐるのはあの娘だといふことを、どうしてだか直ぐにさとつた。私はお母さんに抱かれるやうにして抱かれてゐたのだ。ただあんまり力を込めて抱かれるので息苦しいやうな気がした。しかし私は黙つて抱かれてゐた。からだ中が温すぎるやうになつて來た。あの娘は寢る時には弟と一緒にゐた筈なのに、と氣がついて私はそれがほんたうにあの娘の腕であり胸であらうかと疑ひながら、しかしあまり大きな目をあけては悪いやうな、さうして目をあけてしまへばもう抱

いてはもらへないやうな気がして私は極くかすかに自分の睫毛と睫毛との間をすけて見た。白いまるっこい頸がそのうす目に見えるのであつた。私はふといつかこの人にもらつた杏のことやそのにほひのことを思ひうかべながら、この娘の息と杏のにほひとが同じもののやうな気がした。

次の日の朝、私はそつとその娘を見た。娘は杏をくれた時のやうに笑つてくれたけれども、どうしてだか泣いたやうな腫れぼつたい目をしてゐた。私たち兄弟はその日から三四日の間、汽車で三時間ほどかかる田舎の叔母のうちへ遊びにやられた。家のなかが取込んでゐたからであらう。さうし

て歸つたらまたひよつとして、あのやうにして寝かして貰ふことが出来るかも知れないと思つてゐたのに、うちはもうひつそりしてゐて、杏の實をくれる娘はもう私の家にはゐないらしかつた。私はその娘がどうしたか、どこへ行つたかといふことを知りたいのに、それを人にたづねることはしなかつた。出来なかつたのである。

「子供はそんなことを聞くものぢやない」

私の母はよく私にそんなことを言つた。さうして私はこの母のしつけによつて、自分に話されないことに就ては自然たづねないことにしてゐた。

しかし物わかりの早かつた私はその時、その後の家の中の様子によつてあの夕方になつて不意に家の座敷へ来たあの病人のお客は死んだのだらうといふことや、さうしてこの私には誰だかわからない人のお葬ひがうちから出たことなどを知つた。けれども私は、そんなことよりもつと知りたいあの杏をくれる娘のことはその後何も知らない。私はいつかあの娘と出會つたことのあるあの小路を、その後よく通つて見たことがある。さうしてどこかに杏の木のある家がないかしらなどと考へたりした。

すべてがあやしく魅力あるものとして心に残つたこの出来事は、いつど

うしてといふことなしに私にも自然とわかつて来た。尤も私はそれを誰について確めたといふわけではない、ただ自分で考へ合せて見てさうと決めてゐるのである。といふのは、まあ假りにかうと決めて見たらどうだらう——私の父に妾のやうなものでもあつて、その臨終が私の父の家で行はれ、あの杏の實をくれた娘はその私には誰だかわからない人の娘で、同時に私の父の娘で、つまり私にとつては腹違ひの姉ではないだらうか。さうして私は子供で何も知らなかつたけれども、かの女はそれを知つてゐた。もしさうだとすれば、私はあの晩子供の自分がしつかりと抱きしめられた事をただエロチイックなことと解釋して思ひ出したのではないだらう。

新らしく母をなくした少女が名告り合ふことの出来ない自分の弟を親しみ愛したのかも知れない。——こんな解釋が私に出来るやうになつてから、私はあの杏の實をくれた娘のことをそれとなく母にたづねて見たことがあつた。しかし母は、

「さあ？ 一たい誰のことを言つてゐるのだらうねえ」

とさう言つただけで深く考へ出してくれようともしなかつた。さう思つて見るせゐか、私はどうも母がわざととぼけてゐるやうな氣がした。しかし、一たいに話題に就ては遠慮がちな母と私との間がらとして、それ以上には私も立ち入つては聞かなかつた。

杏の實をくれる娘。彼女を私は淡い初戀の人として思ひ出さうか。それとも縁のうすかつた自分の姉として思ひ出さうか。それは今はもうどちらでもいい。今になつては別に誰にそれを聞かうといふ氣持もない。ただその娘は私の心のなかにこのやうに今も生きてゐる。さうして今まだ生きてゐるとして三十八九にはなつてゐる人が、私にはいつでも十七八である。その島田の娘が杏をくれた時の顔を私ははつきりと目の前に思ひ浮べることが出来る。さうしてそのくつきりした二重瞼の目が、鏡のなかで見る自分のものに似てゐるやうな氣がしてならない。——この私の目は今は亡くな

つた父のものにそつくりだと言はれてゐるものである。

## 高橋新吉のこと

1

僕だつて所謂知名の人間だらうじゃないか。——こんなことを言つてイ  
バルわけじゃない。さきを讀んで見よ——知名の人間だから、見ず知らず  
の人間そのものが舞ひ込んだり、そんな人間の手紙が舞ひ込んだりするこ  
とも月に二十ぺんぐらゐある。これは正直に言ふが實にウルサイことだ。  
手紙の場合、どう返事を書いていゝかわからないし、さて書かずに捨てゝ

置くのも氣になるし、がその手紙の十中八九までは放つて置く。放つて置  
きながら相當永い間忘れずにゐて、氣になつていけない。返事をする時だ  
つて別に擇り好みしての上ではない。その時の氣まぐれで書くだけの事だ。  
手紙にくらべると人間が直接に舞ひ込む方がまだよつぽど始末にいゝ。人  
間の方だと僕はどんな人間だつて追ひ歸すことはしない。ともかくも會つ  
て見る。けれども僕はそんな人間によつて得えをしようと思掛けないから従  
つて彼等の機嫌をとるやうな必要はない。それでも三四年前までは何かし  
ら生來の社交性といふやうなものが残つてゐたと見えて無意識ながら相手  
を氣兼ねしたり眼中に置いたりしてゐたが、近頃になつてそんなことは全

然なくなつた。僕はどの人間が目の前にゐてもその人に左右される事なし  
に偶然そこに居合せたぐらゐに心得て、僕のその時折の氣まぐれな主觀的  
な氣持を、そのまま吐き出したり行爲したりすることが出来るやうになつ  
た。

これがまた自然な大變にいゝ對訪問者術であることがわかつた。即ち初  
對面で僕といふ人間をムキ出しに發表してしまふ事になる。それで愛想を  
つかした人間はもう二度と再び僕の面前には現はれない。それでいいのだ。  
それにも懲りずにまた來る人間は先方でも、どこか知らそのムキ出しのま  
まの僕が氣に入つたのだらうから世話はない——僕の方でも僕の勝手な氣

持を害しない以上は猫が遊びに来たつて犬が尾をふつて来たつて、たとひまた人間が訪ねて来たつて決して邪魔ではないことになる。——そんな風に僕の始めての人間に對する態度が決して了ふと同時に、僕のところへは有難いことに僕をオダテて出世をしようとか、僕をエライ人間に祭り上げて自分もそのエライ人間の仲間にならうとか、そんな俗な卑しい考へを持つた人物は愉快にも一切出入しなくなつた。その代りに僕をエライ人間とは思つてくれなくなつたものだから先方でも、それぞれ勝手な熱を吹いて僕を感心させようとする。僕が感心しなくつたつて、それでも別におこりもしないやうである。かうして僕のところへは自然と藝術上の宿無しのやう

な、人間としてもあまり伶俐と思へないやうな——つまりは大學の秀才や家庭の模範兒などとは全く縁のない人物ばかりが出たり入つたりする。僕はここで虚心で言ふが、かういふ人物に出入されることを僕自身、今は一種の人徳だと自惚れてゐるくらゐだ。それほど僕はさういふ人間が好きである。たまに普通の人間がこんな連中と僕のところへ落ち合つたあとで、僕がへんな人間を好きなのを見て、誰も彼も僕のことをイカモノ喰ひだと言つてゐる。然うかも知れぬ。このイカモノの味をおぼえたが最後、どうしてもう有爲の青年などは見るのもイヤになる。

かういふ僕の友人の一人——その代表的な一人が高橋新吉である。——

あつたと言はうか、あると言はうか。今や高橋はもう超人になつてしまつて僕の友達にはなつてくれないかも知れないから！

## 2

これは餘談だが、キリストといふ人はよほどのイカモノ喰ひだつたに違ひない。大人より子供が好きで、金持より貧乏人が好きで、あまり信用のならない人間と知りながらその男に會計係を頼んで見たり、さうして淫賣あがりの女と性交なしにつき合つて楽しんだのだ——今ひよつとそんなことを考へて見た。

## 3

高橋新吉が僕のところへ遊びに來たのは、タシカ去年——いや未だ今年か知ら、ともかくも僕の頭のなかだけでは割に永い間に感ずるが、何しろ寒い時だつた。そのころは妙な季節と見えて、その前後に氣違のやうな男が二人、浮浪人のやうな人間が三人、不良少年のやうな一團、相前後してゴタゴタと僕のところへ出入しだした。

高橋新吉はその氣違ひのやうな二人のうちの一人で兼ねて浮浪人のやうな三人のうちの一人でもあつた。



或る晩始めて訪ねて来た高橋のことを、うちのものは、どうもあまり爽快な人相の人物じゃないと註釋して取次いだ。僕自身玄關へ出て見ると、年のころ二十から三十までの間の男で、オドオドしたやうな言葉で、つかれきつたやうな目つきで人を見上げるそのくせ、何となく人を食つたやうな太々しい様子で、古新聞のキレツパシへ大きくなぐり書きをした反古をつき出し乍ら面會を求めた。それを手にとつて見たが何のことだかわからないので、

「これや何だらうな？」と言ふと

「紹介状です。辻潤からの」と言ふ。

なるほど酔筆らしく書きなぐつた辻潤の紹介状らしい。辻からの紹介じやいづれこの見かけに違はず相當のイカモノに相違ないと思つたが、その日は何か用があつてゆつくり會つてはゐられなかつた。高橋はまた來ると言つたが時日の約束はお互にしなかつた。ただ晝間はダメだと高橋は言つた。何故かと聞くと、或新聞社の食堂に居るので朝の八時から夜の八時まで(？)立ちつづけて、その内に皿を何百枚とか洗ひ、飯を何百杯とか盛らなければならぬから、ぐつたりするとこぼした。(彼の詩に「皿、皿、皿、皿、皿、皿」とあるのはそのころの作である)さうして謄寫版刷の詩集見たやうなものを二冊とそれから相當に部厚な原稿とを渡しながら今度くるま

でにそれをちよつとでも覗いて置いてくれと言ひ置いた。その厚い原稿は「黒子」といふ失戀小説であつた。覗いて見たがへんなものであつた。小説は面白くまづかつた。當時の僕のロクでもない尺度に於て。いい悪いは超越してゐたが、高橋が希望したやうには賣れない事だけ確實な代物だつた。詩の方は解るやうな解らないものばかりであつた。

二度目に高橋が來た時に、私は彼の殘し置いたものの印象を正直に言つた。彼は謄寫版刷の自分の詩集をとり上げて説明づきで讀んで聞かせながら僕に感心を要求した。つまらないと答へると、彼は特色のある返事をした。「ふむ！ つまらんですかね。さうですかね。なるほど自分でもつまら

んですね。何しろでたらめですから、つまらんですよ。」

それは少しも反語的なものでもなくまた絶望的なものでもなく正直で同時に人を喰つた——言ひ得べくんば自分自身をも喰つたものだつた。それが僕には氣に入つた。彼が讀み上げたものうちでいくらか私にも面白いやうに思へるのが二つ三つあつた。それは面白いやうだといふと彼は無邪氣によるこんだ。話をして見るとこの男は何ごとでも相手のいふ事を突きつめて見なければ承知できないといふ風があつた。それがまた決して相手をやり込めることに興味があるからといふやうな、イヤなものではなかつた。その點も僕は好きだつた。その晩、僕は話の序に別に深い意味もなく

「それや泥棒をしたつてスリをしたつて、或は人殺しをしたつて、」  
と言ひかけると、彼は

「私はそんなことを——まあスリ見たいなことをして居たですがね。」  
と平然とさう問ひもしない事を答へた。併しそんなことを吹聴してイバ  
つてゐる風でも何でもなかつた。

彼のすべての態度の中には、困憊と疲勞と眞實と自暴自棄と飄逸とがこ  
んがらがつて混沌として、しかも同時にもうどうにもならない程度に融合  
しきつてゐた——その人間も、その作品、少くとも私にもわかるその散文  
的小品に於ても。

僕が高橋の作品で始めて感心したものは「生蝕記」である。第三回目に僕  
を訪ねた時に、彼はその謄寫版冊子を僕に二部くれた。枯れ切つたその筆  
致と、しかも淡々と書き流したやうで實は周密な用意のある簡素と、世俗  
的な善惡などにコセコセと捉はれない心境とが正直なところ僕を相當に敬  
服させた。それが彼の自叙傳的作品であつて、彼が十九の時に書いたもの  
であることを知るに到つて、僕は、中流の家庭に生れて相當の教育のある  
青年がどういふ事情とどういふ心持でそんな境涯を送るやうになつたかと

いふ事をちよつと不思議に思ふと同時に、それぐらゐの若さでこれぐらゐ投げやりな筆致と心境とをどこから得て來たらうと考へると、どうやら僕は少し不氣味な心持になつた程であつた。

その後、高橋は新しいものを書くごとに僕に見せた。「生蝕記」のなかに早くその萌芽を發してゐた彼特有の味は後になるほど鋭くなり深くなり複雑になつて來たとは言へ、だんだん斷片的になつてしまつて、纏りがあるといふ點にかけては「生蝕記」がやはり第一であると僕は思ふ。尤も高橋の藝術觀から言つたら纏りがあるとか無いとかいふことは少しも重大な價値でないであらう事は僕と雖も知つてゐるが。

高橋が僕によく原稿を見せた理由の一つとしては、いつも金に困つてゐた高橋が僕を通してどこかへ原稿を賣りたかつたのだといふことは確である。しかし僕は一つも高橋のために原稿の世話をしてやつたことはない。金で原稿を買ふ雑誌のすべての編輯者に高橋の味はわからないといふ事を僕は心得てゐたからである。さうして僕は高橋にむかつてよく言ひ言ひした――

「君は半世紀進んでゐる第三流の作家だ。ただの三流の作家なら原稿は賣れるのだ。君は半世紀進んでゐる。そこが君の世間に通用する人になれない致命的な點である。」

僕は高橋に對つてそんなお座なりを言つたのじゃない。さう信じてゐるのだ。誰に向つてだつてお座なりを言ふ必要はない。しかし人がそれを要求すれば氣の弱い僕はうつかりそれを言はせられないとは限らない。しかし誰が高橋を目の前に据ゑてお座なりを言ふだらうか！ 事實、高橋は最も眞實を要求する人間であつた。さうして彼自身亦眞實であり眞劍であつた。——それがその、何と言はうか、つまり高橋流に眞實であり眞劍であつたのだ。氣質として彼は理想家であつた。理想を見失つた理想家であつた。さうして彼の作品のなかには見せびらかさない眞實感が切なく蹲つてゐる。前世紀のデカダンが美を貪り耽つたのに對して、高橋は眞實を

人間にはどうしてもつかみ切れない眞實を貪り耽つて、さうしてその結果めちやくちやになつてゐる。——それに因つて理想家高橋は深い現實家と亦一味相通じてゐる。さうして高橋は人間生活のあらゆる卑しさを現してはゐるが、然もその作品の背後には地上の腐肉に目をくれてゐる枯木のでつぺんの寒鴉のやうに奇妙なエスプリーが、無雜作に燻つてゐる。

私は斷言するが、高橋の散文的小品を見て或程度までそれに感心し得ない人間は、作者として批評家として鑑賞家として氣の毒にも、舊式な美學をあまり知りすぎて美そのものを却つて知らなくなつてゐるのだ！

高橋は見識で書いたのではない。學問で書いたのではない。趣味で書い

たのではない。人真似て書いたのではない。女房と子供とを兩脇へ坐らせて會社の重役のやうな夕飯の幸福の後に、柄にないつくりごとの孤獨や憂鬱をなぐさみものにしたのではない。彼は身をもつて書いただけだ。妙に燻つたへんに歪んで心臓を取出して見せたのだ。高橋の文學のなかには氣まぐれらしい出鱈目はあつても虚飾といふものは寸毫もない。そんなものは高橋には七面倒くさかつたのであらう。さうして氣まぐれな出鱈目は？それは瞬間的ではあるが、やはり眞實には相違ないじゃないか？——少くとも虚飾——俗情主義の論理井然や形態完美や情意透徹よりは！

高橋の詩は散文に比べてもつと出鱈目で氣まぐれに僕には見える——さうして、實際はこれ以上のことは僕にも十分に解つたとは言へない。が彼の詩句のなかには散文に現はれたよりもひよつとするとともに「生理的な高橋」がある氣がする。

高橋はある時、詩集を出すかも知れないからその時には僕に序を書けと言つた。僕は次のやうな事ぐらゐでよいならば書かうと約束した。——高橋の詩は僕には解つたやうな解らないやうな具合だ。さうしてただ嚙言の

やうに思へる。生活感の悪夢に怯されて疲れ切つた肉體が意味のないこと——當人にもその瞬間だけしか意味のない事を呻き出すのじやあるまいか。さうして囁言や寢言のなかにも面白いものも面白くないものもある。人々の見る夢にだつて個性がある。或は夢の中の方が實生活よりも、もつと著しい個性が出るかも知れない。ところで高橋の詩は、高橋の囁言と寢言とは時々僕が聞いて面白いものもある。それはその出鱈目の言葉を通して高橋が惱まされてゐるその時折の悪夢を私も亦感知するからである：と大たいそんなことであつた。高橋は彼の詩に對する私のその解釋に相當満足してゐたやうであつた——少くともその日は。さうして言つた。

「それでいいのです。すべての詩はそれでいいのです」と。

本當に高橋の詩の中にも、私が見て面白いと思ふものがある。夜、橋の上から自分の外套を水のなかに投げ捨てることを書いたものの如き（彼自身はそれをエドガア・アラン・ポオのものに匹敵すると自負してゐたが無理もない事だ）、又は秋の庭のさきざまな花を歌つたものの如きがその一例である。

ところで高橋自身が最も執着してゐたと思へる作品と言へば、それは彼

のものとしては最も長く、その代りに最も喘ぎ喘ぎ書きつづけられてゐるあの「黒子」であつたやうに思へる。この極くふしだらなそのくせ一字一句をも改めることの出来ない特色を持つた極めて個性的な作品を、高橋は非常に金にしたがつてゐた。——金にといふよりは、彼からよく聞いて見ると結局ただ活字にしたかつたのだといふ事がわかつた。彼はそれに就いて私に告白して訴へた——どんなつまらない一文の金にもならない雑誌の六號活字でも出したい。さうしてそれが活字になつたところであの女に讀ませてやりたいのだ、と。その女といふのは言ふまでもなくこの失戀小説——といふよりも一つの奇體な心理學的に深いヒューマンドキュメント

——の女主人公である。この非常識極まる泣き笑ひしてやりたいほどバカバカしくロマンチックな、そのために高橋の一生が今日のやうなものになつてしまつたとも言へば言へるところのその戀愛の相手のことである。この小説の寧ろ狂的な情熱に比べてはマノン・レスコオのごときは寧ろ何でもないものである。言はば、高橋は自分のひよつくり見た或る晩の夢に身を打ちこんでたうとうその生涯を棒に振つたやうなものである。高橋のその女に對する熱心は彼が正氣であつた最後まで實に異常なものであつた。その女の最近の住所がわかつたと言つて手紙を出した。その返事を受けるところとして僕の宿所を書いて置いたとかで、もしやその返事がとどき



はしないかといふので、思ひつめた且つは退屈でしかたのない高橋は毎日のやうに僕のところへ様子を見に来た。返事はたうとう來なかつたやうである——高橋の口角に漂ふあの柔和で、ひどく哀れて少しばかり自分をも他人をも馬鹿にしたやうな微笑が今ふいと、私の目の前に浮んで來た。高橋の歪んだ理性の中で今あの女がどんな形の幻影になつてゐるであらうか。知りたいものである。

## 7

初めは十日に一度ぐらゐづつであつた高橋の僕への訪問は、そのうち殆

んど毎日、或は隔日になつて來た。——僕のやうな他人に對して何一つ親切であり得ない人間を、それほどの友達にしなければならなかつた高橋は不幸であつた。どこそこへ原稿が賣れたと言つてはそれを僕に報告して例の力ない微笑がその日だけは大分元氣に見えた。かと思ふと、しをれ返つて何も言はなかつた時も多かつた。さうして彼を支配してゐたものは大部分その日その日の體の加減であつたやうに見える。よく議論をしたがる日があつた——それは寧ろきげんのいい日であつたが。高橋の説には大體僕はいつも同感であつた。ただ高橋の説に一々賛成してゐたならば、それではなくてさへもどうしていいか解らない僕は高橋と相擁して虚無の奈落へ心

中しなければならなくなりさうで、僕にはさすがにそれが怖ろしかった。それ故、僕はそんな場合いつも僕自身が人生を光明的に見てゐる人間であるやうな顔をして、おしまひには僕は言つた。――

「君のやうなダダをコネて見たつて、世界中で誰ひとり困る人はないのだぜ。君が愉快ならいくらでもそんなヤケクソを言つて居たまへ！　だが僕は知つてゐる。君はそんな考へで満足しきつてはゐないのだ。それならこそ君はいらいらして僕などをとつつかまへて食つてかかつたり説教したりするのだ。」

高橋は例のつまらなさうなしかしどこかしら可憐な微笑――それが彼の

顔に現はれた時だけ彼はやつと二十二三の青年に見えた。今再び僕はそれをはつきり思ひ出すが、それは思ひがけなくもしをらしい慚羞を帯びてゐて、さうして永いこと笑ひを忘れてゐた人間が笑ふといふのはかうしてするのであつたらうかと思ひ出してもしたやうな、ためらひ勝ちな大儀さうな微笑を口角に漂はしながら「でも、どうもこんなことをでも言ふより仕方がないのだ。どつちだつて同じ事だ」とそんな意味のことでもつと微妙な言葉を軽く力なく言つて、すゝり、と僕の言葉の下をくぐり抜けてしまつた。あの時のあの微妙な言葉をそつくり覚えて置かなかつた事を僕は今ひどく残念に思つてゐる。あの言葉は實に簡明に彼の人生感を語つてゐたの

に。さうして彼の理窟には一向へこまなかつた僕も、彼のその心持には一言も有り得なかつた。思ふに高橋はいつも自分自身の衷うちで自分自身と議論をする時にもやはりそんな軽い微妙な言葉で逃げまよつて鼻をつけてゐるのだらう。その點で僕は高橋を臍甲斐なく思つた——が、そんなことを言へた僕自身でもない。

8

僕が留守のところへ彼が來た。取次の人が、「留守だ。」といふと。

「嘘じやないですか。」と反問した——誰にも一度も居留守などは使はない

僕だといふことを知つてゐた高橋なのに。

「嘘じやありません。お待ちになつたらいいでせう。ちよつと散歩に出たのですから直きかへります。」

「歸るか歸らないかそんな事はわかるものか。」

そんなことを言ひ捨て、歸つた事もあつたさうだ。——よほど氣分の悪い日であつたのだらう。一ぺん電車賃がないと言つたから僕は五圓サツを出して渡したら彼はそんなにはいらなと言つて返しさうにした。しかし外には僕も無かつたから皆持つて行けと言つたら、「こんなに貰つてもいいのですか。これだけあれや僕は一ヶ月生活する」と言つた 彼の日常

生活の脚註にもなると思ふから、こんなケチなことを敢て書くのだ。

9

ダダイズムといふものがどんなものであるか僕は知らない。だから高橋がダダリストだかどうかそんな事も知らない。知る必要もない事だ。ただ僕は知つてゐる。高橋の藝術と生活とはアカデミシヤンの様子ぶつた藝術に對する又、平俗的幸福のなまぬくい生活に對する徹底的の反抗と挑戦とである。彼の消極的な——いや消極をも積極をも超越した態度は、上述の意味で力強いものである。この精神によつて高橋は恒に生きる。彼は明

治大正を通じて藝術史上に於ける著しく特異な個性である。澤山のゴマカシものなかで、それらの巧なそれぞれのメツキが不能に剥ぎ去られたあとで、彼はかけらになつて燦然とする。僕は無論その偉大を説くのじやない。説かうにも偉大の一面は常に普遍的であるに對して高橋にはそれがなかつたのだから。ただ彼には見る人にだけ見える暗示がある。

(一九二二年十二月三十一——二三年一月四於神戸)



大正十二年二月十二日印刷  
大正十二年二月十八日發行

(定價八拾錢)

◀年二二九一が残▶

著者

佐藤春夫

發行者

東京市牛込區矢來町三番地  
佐藤義亮

發行所

新潮社

東京市牛込區矢來町三番地  
電話牛込  
八八八八  
〇〇〇〇  
九八七六  
番番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所

東京市小石川區西江戸川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社  
印刷者 佐々木俊一

著氏夫春藤佐

都會の憂鬱	田園の憂鬱	剪られた花	殉情詩集	我が一九二二年	南方紀行	幻燈	お絹とその兄弟
(長篇小説)	(長篇小説)	(長篇小説)	(詩歌集)	(詩文集)	(支那紀行)	(短篇集)	(短篇集)
送料七拾錢	送料七拾錢	送料七拾錢	送料九拾六錢	送料八拾六錢	送料八拾錢	送料五拾八錢	送料四拾錢

版出社潮新

